

## 進化の考えと生物（および人間関連）学の融合、連携

長谷川眞理子

総合研究大学院大学先導科学研究科

生命共生体進化学専攻

進化とは、生物の形質が世代とともに変化していくことをさす。このことは、地球上のすべての生物は共通祖先から派生してきた存在であることを示している。進化は、それぞれの種が独立に創造・生成されたという考えを否定し、我々ヒトが特殊な存在であることも否定するとともに、すべての生物を統合的に理解する土台を与える。生物間に見られる共通性も多様性も、進化の歴史の理解の中で統合されるのである。

進化がどのように起こるのか、なぜ、生物は世代を経て変化するのか、そのメカニズムが、突然変異と淘汰と遺伝的浮動である。これらのメカニズムが、生物の集団ごとに異なる性質を生じさせ、個別の適応を作り出す。これらの働きが生物に共通のプロセスなのであれば、ヒトが持つ多くの特徴も、これらのメカニズムの結果として生じたと推論することができる。

ダーウィンが『種の起源』、『人間の由来と性淘汰』、『動物と人間の感情表現』を著した背景には、この理解が確固としてあった。それゆえに彼は、現在で言うところの、地質学および、形態学、古生物学、発生学、生態学、生物地理学、人類学、心理学、行動学など、生物を研究する実に広範囲な分野に目を配り、総合的な議論を展開したのである。ダーウィン以外の学者が提唱したいくつかの進化論は、ここまでの広がりの一貫性を欠くように思われる。

キリスト教に基づく西欧の伝統的な人間観では、人間は特別な存在であり、その「特別さ」は、理性と道徳の保有にある。それは神から与えられたものであり、生物学的な形質ではない。したがって、保守的人間観の持ち主（ライエル、ウォレスなど）にとっては、理性と道徳の保有による人間の特別さこそが、進化（とくに人類進化）を受け入れられない根拠であった。その裏返しに、ダーウィンにとっての挑戦は、理性や道徳がいかんして進化で生じるかを説明することであった。当時は、非ヨーロッパ文明の「未開人」の存在をめぐって、人種は種か亜種かなどの問題が議論されていた。それは、奴隷制の是非をめぐる政治的議論の根拠ともなっていた。ダーウィンにとっては、人類が他の類人

猿の系統から進化してきたことを示すのみならず、すべての人種が一つの種であることを示すことが非常に重要であった。そして、道徳性がどのように生物進化で出現するかを示し、したがって、「未開人」の理性や道徳の状態も「ヨーロッパ文明人」のそれも、基盤は同じであり、現在見られる違いは、文化と教育の産物に過ぎないことを論じたのだった。

E. O. ウィルソンの社会生物学が強い反発と長引く論争を引き起こした根源にも、人間観の問題がある。進化生物学、とくに人間の進化をめぐる生物学は、宗教の形をとるものも、人文社会系諸学の学問的伝統からのものもすべて、人間性の根源の理解とその価値づけをめぐる論争を引き起こす。そのような論争を乗り越えて、やがて人文社会諸学と進化生物学は融合するのだろうか、近年の発展をもとに考察したい。